

[実践報告]

エコキャンプを組合わせた環境ボランティア実習

小川 巖¹・嶋崎 正躬²

¹エコ・ネットワーク (北海道教育大学札幌校非常勤講師)

²北海道教育大学札幌校

Environmental Voluntary Exercise Combining with Ecocamp Activity

Iwao OGAWA¹ and Masami SHIMAZAKI²

¹Eco Net work, Sapporo 060-0809, Japan (Part-time Lecturer of Hokkaido University of Education, Sapporo)

²Course of Environmental Education, Sapporo College, Hokkaido University of Education, Sapporo 002-8502, Japan

はじめに

近年ボランティア活動の必要性が各方面から言われるようになったとはいえ、福祉分野の活動が大部分を占めているのが実態であろうし、そのようなイメージが固定化しているとさえ言えるだろう。一方で福祉以外の分野に関わるボランティア活動も地道に取組まれるようになってきた。環境分野もそのひとつである。

札幌校に新設された地域環境課程では講義や実習を通じて、人間と環境との関わりについて理解を深めることを目指して、さまざまな取組みや試みを行ってきたが、さらに一歩進めて学外にフィールドを求め、環境を仲立ちにして地域課題に取り込む環境ボランティア実習を行うこととした。2000年(平成12年)から2年生の集中、選択科目として開講し、以後毎年実施している。道内はもとより、全国を見渡しても環境ボランティアをテーマにした実習をもつ大学は見当たらない。この種の実習を通じて地域と環境の関わりだけでなく、そこに住む人々の生活に触れる機会が得られ、その意義は大きいと考える。

本報告は過去4回の実習のうち、4回目の2003年の実習を中心にまとめたものである。以下、実施年を明記していない場合は、すべて2003年の実習内容である。

1. 実施概要

4回とも夏休みの後半、お盆明けの2泊3日の日程で実施した。複数の環境ボランティア・プログラムを実践するとともに、よりよく地元を理解するために博物館等の施設見学もできる限り行うようにした。宿泊は原則テントで行

なった(悪天候の場合キャンプ場内のバンガローや近くの建物に避難できるよう配慮した)。

キャンプ生活に伴い必然的に発生するゴミをできる限り最少化するエコキャンプに心がけた。食事を作る時間と負担を軽減するため、食事スタッフ2名を支援スタッフとして同行させ、食事メニューの作成、買出し、調理等を一任した。学生は交代で支援スタッフをサポートする体制をとるとともに、食事の運搬、片付け、食器洗い等は出来るだけ行なうようにした。

学生と地元民との交流の機会を持つように努めた。また環境ボランティアの実習に当たっては、できるだけ地元の人たちの協力指導を得よう心掛けた。現地と大学の往復には大学の専用バスを使用した。

実習終了後、学生に課題テーマを課し、学生自身が実習の内容を再確認する機会にするとともに、翌年以降のプログラムを中心とした問題点の整理に資するためのデータとした。

過去4回の実施状況は次の通りである。

第1回 2000年8月21日～8月23日 天売島(苫前郡羽幌町) 参加学生31名、教員3名、支援スタッフ2名

・島内の町有林で伐採され放置されたままのトドマツ間伐材を利用してベンチを製作。

・完成したベンチを島内の遊歩道沿いに設置。

・天売島海鳥情報センター「海の宇宙館」見学。

・留萌市美サイクル館見学。

第2回 2001年8月21日～8月23日 ニセウ・エコランドキャンプ場及びその周辺(沙流郡平取町) 参加学生23名、教員2名、支援スタッフ2名

の実施が危ぶまれたが、地元関係者の努力によって何とか実現に漕ぎつけたという経緯がある。以上のような理由から一部のプログラムを変更することになった。「スズラン群生地における侵入雑草の除去と移植」がそれである。スズランの群生地としては全国最大の規模といわれる芽生（めむ）地区のスズラン群生地に至る道路が不通になったため、急遽「ソバ畑の雑草除去」に変更した。幸いなことにメインプログラムとも言うべき「森林の手入れ」（自然林の除間伐、ツル切り、枝打ち及び山取り苗の移植）は、ほぼ当初の予定通り実施することが出来た。以下これらプログラムの作業内容をまとめてみる。

（１）ソバ畑の雑草除去

地元の地域おこしグループが「エコランド」キャンプ場に隣接して耕作した約0.5haのソバ畑で雑草除去を1日目と3日目の約2時間ずつ実施した。

ソバの花や実を見るのは初めてという学生がほとんどで、作業開始に当たって雑草をこのままの状態に放置すると、刈り入れをした際ソバの実と一緒に混入してしまい大変な手間を要することになる旨、その目的、意義を説明した。

数人ずつのグループになって抜き取りを行なったが、炎天下の単調な作業だったこともあり学生達にとってかなりきつい作業であったようだ。あとから感想を聞くと、雑草とまちがえてソバの茎を抜いてしまったり奥へ行くうちに踏みつけてしまったりと、結構気を使う作業だったと回答が案外多かった。ほとんどの学生にとって自分の背丈ほどある雑草を抜く体験は初めてだったようで、2日間の作業できれいになったソバ畑を目の当たりにして、ある種の充足感を味わったのではないかと思われる。



写真3 ソバ畑の雑草除去作業



写真4 食事の準備

（２）森林の手入れ

今日、除間伐、ツル切り、枝打ち等を伴う森林の手入れは、植樹体験とともになりにかなりポピュラーな環境ボランティアのプログラムになっている。本実習でも2001年度には、エコランド・キャンプ場に近い町有林（15年生のカラマツ人工林）で一連の手入れ作業を実施している。一般には森林の手入れを実施するのは、大部分が若令の人工林である。人工林は高密度の植樹を行ない、一定年を経てから何回かの除間伐を経て、成林させるのが普通である。

しかし2003年の森林の手入れは、本プログラムの指導機関である北海道日高森づくりセンターの助言により、放置されたまま年月を経過した林（私有林）を対象とすることになった。構成が単調な人工林と異なり、このような半自然状況の森林の手入れは、これまで実施例が少なく試行錯誤がある程度覚悟しなければならぬとはいえ、森林の構造を理解するにはうってつけのプログラムであった。

作業に先立ち数人で1グループを編成した。現場では森づくりセンターの職員から森林の役割、構造等の他、使用する道具の使い方について説明を受けた。作業内容と手順はおおよ次の通りである。

- ・あらかじめ割り当ての決まっている作業区域へ説明終了後、グループごとに移動する。
- ・倒れかかったり、ツルに巻きつかれた木、生長が著しく遅い不良木などを選別して除伐する。
- ・木々がこみあった状態にある場所では、適当な間隔に間引く間伐を行なう。
- ・木に絡みついて成長を阻害するツル植物（コクワ、ヤマブドウ等）の幹を切断するとともに除去する。
- ・作業地から約500m離れた対岸の造林地に行き、種子から育った山取り苗を1人当たり1~2本採取。
- ・山取り苗を再び作業地に持ち帰り、空隙の出来た林床に穴を掘って移植した。

・作業が順調に進んだグループは、切除したツル植物やマタタビなどの実を活用して即席のリース制作を行った。



写真5 「森の手入れ」作業の指導に当たった森づくりセンターのスタッフ



写真6 密生した林の除伐、間伐作業



写真7 生い茂った林のツル切り作業



写真8 掘り出した山採り苗

5. エコキャンプ

よりよい地域の環境作りを実践するのが環境ボランティア活動である以上、その期間中の生活も環境に配慮したものであるべきとの観点からエコキャンプの考え方をできるだけ取り入れることとした。学生には事前に「エコキャンプの手引き」を配布して、意識の徹底を図った。手引きの内容をまとめると次の通りである。

(1) エコキャンプの基本ポリシー

- ・キャンプは短い期間で、日常生活のすべてを体験できる野外活動と位置づけます。
- ・キャンプ生活を通じて身近な自然や環境への関心が深まることを目的とします。
- ・われわれが日常、あまり意識しないで使っている水、電気やガスなどのエネルギー、ゴミ、石けん等について、使い方を考え直すきっかけにします。
- ・キャンプの中に以上の問題に直結するプログラムを取り入れて、楽しく実践する環境体験とします。

(2) エコキャンプを成功させるための留意点

環境に配慮した準備をすることでエコキャンプは

始まります。「使い捨てをしない」「ゴミを出さない」「くり返し使う」「周囲の自然に気配りする」の4つが基本です。事前の準備がきちんと出来ていれば、エコキャンプは半ば成功したようなものです。

- ・皿、コップ、スプーン、はし等の食器類は各自で用意します。(紙皿、プラスチックコップ、割箸は使わない)。
- ・食器類はできるだけプラスチック製品を避け、陶磁器または金属製のものをお勧めします(環境ホルモンのことを考えて)。
- ・できるだけ手間がかからず、後始末のいらぬエコッキングに心掛けます。
- ・米のとき汁はそのまま流さずにバケツ等に貯めて撒水用として使います。
- ・食材はあらかじめ切るなどして容器に取めるとゴミなどを出さずに済みます。
- ・食材をくるむ場合、新聞紙、包装紙等を再利用します。ポリ袋は、使用済みのものを再利用して下さい。
- ・中身の入ったペットボトル容器は持ち込み不可です。中身を水筒などに入れ替えるとよいでしょう(ペットボトルを水筒代りに使うのは構いません)。
- ・アルミ缶、スチール缶を問わず缶製品の持ち込みも不可です。リターナブルのビンをお勧めします。
- ・テーブルを拭いたりするのに、ティッシュペーパーは避け、フキンを用意すると便利です。
- ・食器拭きには包装紙、トイレ用にはトイレットペーパー等、使い分けるとよいでしょう。
- ・虫除けスプレーは禁止です。蚊取線香、ハッカ油等の天然製の物を用意して下さい。
- ・食器洗い用の合成洗剤は、川や水を汚染するため持ち込み不可です。洗剤を使わないで拭き取るか、主催者が用意する石けんを使ってもらいます。
- ・ゴミは持ち帰りとします(最後にどの位のゴミが出たか、グループごとの“ゴミコンテスト”を実施します)。
- ・一般に行なわれている大掛かりなキャンプファイヤーはしません。数人が火を囲んで語らえる「木のロウソク」を自分たちで作ります。

手引きを読むと、一種の持ち込み制限と受取れるわけで、初めの内はかなり窮屈なキャンプになると想像した学生もいたようである。しかし実際にキャンプを通して、不便さはほとんど感じなかったと答える学生が多かった。さらに、これならば別のキャンプでも実践できるという心強い声もあった。環境ボランティアをテーマにした実習の中で取り入れたという点を割引いても、エコキャンプの目的は十分に達成されたと考えてよいだろう。



写真9 テントの設営



写真10 エコキャンプの成果—こんなに少ないゴミの量

6. 協力・支援体制

2泊3日のそれほど長くない日程の実習とはいえ、地元 of 行政機関、各種団体、個人には多大なご協力、ご支援を頂いた。裏を返せば、土地と人が絡む環境ボランティアの実践に当たっては、十分な下準備が必要になることを意味している。これらすべての機関、関係者の皆さんにこの場を借りてお礼申し上げる。

(1) 地元としての全般的な協力・支援：平取町役場(町づくり推進課・産業課)、平取町教育委員会、町立二風谷

アイヌ文化博物館

- ・ニセウ・エコランドキャンプ場の利用に当たっての使用料の減免
- ・関係パンフレット及び同町発行の「わくわく自然探検ブックー平取町フォレストクラブ読本ー」の提供
- ・博物館利用の入館料減免
- ・日高森づくりセンターとの連絡調整
- ・「森林の手入れ」プログラムに使用する道具の準備

(2) 環境ボランティアプログラム「森林の手入れ」作業：
北海道日高森づくりセンター（平取事務所：所長 木戸一男氏）

- ・森林及び森の手入れに関する事前説明
- ・森林の手入れ（天然林の除間伐、ツル切り、枝打ち、山取り苗の移植）の全般技術指導
- ・関連資料の提供
- ・使用する道具・器具の準備
- ・作業地の通路の事前刈払い

(3) 生活面の支援：「ニセウ・エコランド」キャンプ場、ニセウ園、地元地域おこしグループ

- ・炊事場、調理器具及び食事会場等の提供（ニセウ園：佐々憲一氏経営）
- ・歓迎会のセッティング（やった郎かい他）
- ・バンガロー、入浴施設の提供（キャンプ場）

特にニセウ園の佐々憲一、富子ご夫妻には上記の他、新鮮な食材の提供、「森林の手入れ」を行なった私有林の使用等で全面的な協力、支援を頂いた。佐々さんの協力なしには、本実習は成り立たなかつたであろう。また3回目以降続けて参加の桂川雅信氏（非常勤講師）には、実習、生活の両面において適切な指導をして頂いた。記してお礼申し上げる。



写真11 地元の人たちとの交流会



写真12 夕食風景

まとめ

前途のとおり、記録的な豪雨直後の実習であったため、災害の爪跡を目の当たりにして強烈な印象を受けたという学生が多かった。思いがけない「災害教育」が出来たのかも知れない。一方災害のためのプログラムの変更が生じたが、地元の人たちの協力によりスムーズに別プログラムに切り替えられたのは幸いであった。

提出されたレポートを見ると、メインプログラムの「森林の手入れ」をポジティブに受け止めた学生が大部分を占めた。これは除間伐等の作業を進めて行くにつれ、共同の作業を通じて雑然とした森林がスッキリした姿に変わっていくのが実感できたからではないか、と推測している。じかに人を対象とするボランティア活動は、感謝の気持ちを感じることによって充足感を覚えるタイプである。一方、環境ボランティアは目に見える形で「仕上がっていくのを実感する」タイプの活動と言えるだろう。そういった環境ボランティアの積極面をもっと評価してよいのではないかと、思う。

キャンプを伴うボランティア活動である以上、食事の用意は学生がした方がよいとする意見は以前からあった。しかし、炊事に不慣れな学生にその部分を担わせると、一口の大部分が食事の準備、片付けに費やされかねない。それ故に一貫して採用してきた支援スタッフを主体に炊事に当たり、学生が協力する体制が現実的であろう。

もうひとつ課題をあげると、お膳立てした計画に学生が乗っかるだけでなく、本来はプランニングの段階から関わった方がよいという指摘である。「協力・支援体制」の項で触れたように、この程度のプログラムであっても多くの機関・個人の協力があつて始めて成り立つことをいかに実感させ、どのようにその一部を担えるようにしたらよいかは、残された課題と考える。